
ハヤテのごとく！～BIOHAZARD～

天王州 アテネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「PDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテの「」とくー～ B I O H A Z A R D

【Zコード】

Z0730

【作者名】

天王州 アテネ

【あらすじ】

ミカド・ハイパー・エナジーが開発した薬品によって日本が大パニック。政府はゾンビが溢れかえる東京を封鎖し、一切の出入りを禁じた。

白皇学院に取り残されたアテネ、ハヤテ、ヒナギクはどうなる…?

1 バイオハザード発生（前書き）

皆さん、こんにちばよ。アテネよ。

今回は都内が大変なことになってしましました。あのホラーゲーム
が現実のものとなってしまったんです。私たちは無事に東京を脱
出出来るのか？

1・バイオハザード発生

ミカド・ハイパー・エナジーが若返りの薬を開発した。だが、それは悲劇の幕開けだつた。

東京は封鎖された。都内は肉食獣と化した元人間、所謂ゾンビの群れでごつた返していた。

杉並の白皇学院の理事長室に、天王州 アテネといふ名の金髪縦ロールの端麗な少女と水色短髪で女の子のような顔の少年は居た。ああ、前者は私だ。

「大変なことになつたね」

ハヤテが窓の外を見ながら言つ。

校庭にはゾンビがうよと居る。

「ハヤテ、お腹が空きましたわ。もう二日も食べてませんわ」

「救助隊が来るまで我慢して、アーたん」

「我慢出来ないわ。私は食堂に行くわよ」

私は立ち上がり、扉の前に行く。

「ダメだよアーたん！ 校舎の中にも奴らが何匹か居るんだよ！？ 危険すぎるつて！」

「飢え死にするよりかはマシですわ」

私は扉を開錠してドアノブを捻つた。

「開けちゃダメ！」

しかし、私は扉を開け放つた。すると、金色の髪留めを頭に付けた桃色長髪で全身血塗れの少女がうなり声を上げながら入ってきた。彼女の名は桂 ヒナギク。この学校の一年生で生徒会長だつた。だつた、というのは、彼女がミカド・ハイパー・エナジーの開発した若返りの薬、元い・Tウイルスの影響でゾンビになつてしまつたからだ。

「危ない！」

ハヤテが私に噛みつこうとしていた桂さんを蹴り飛ばした。

桂さんは廊下の壁にぶつかり、落ちて横たわる。

「アーテん一人じゃ危ないから僕も行くよ」

桂さんはうなりながら立ち上がり、ハヤテに噛みつこうとした。

「お前の仲間になる気は毛頭ない！」

ハヤテは再び桂さんを蹴り飛ばした。しかし、それでも桂さんはしつこく立ち上がり、襲いかかる。

「好い加減にしろ！」

ハヤテは桂さんを蹴り倒した。

怒った桂さんが木刀の正宗を手にする。

「そんなのあり!?」

桂さんが正宗でハヤテを切りつける。

「ぐわっ！」

ハヤテは怯んだ。その隙に桂さんが噛みつく。

「うっ！」

「ハヤテ！」

私は体内から白桜という真剣を取り出して桂さんを切りつけた。

「ぐつ……！」

後退と同時に痛そうな顔をする桂さん。

「貴方、まさか態とやつてるの?」

桂さんは正宗を仕舞った。

「バレちゃしようがない」

どうやら私たちは桂さんに騙されていたようだ。

「はあ、よかつた。危うくゾンビになるところでしたよ」

「貴方たちが理事長室に隠つてゐる間に校舎内のゾンビは一掃しとい

たわ

「じゃあそれ返り血?」

「ええ

「紛らわしい」とすんな！」

桂さんに殴りかかるうとした私をハヤテが羽交い締めにする。

「アーラン、乱暴はダメ」

「天王州さんはお腹が空いてるからイライラしてるのよね？」

大正解。

「食堂に行けば少しきらにはあると想つけど、ゾンビ以外の化け物が居るからやめといた方がいいわ」

「ゾンビ以外の化け物？」

桂さんが頭上に触手が生えた凶暴そうな黒服の男の姿を浮かべる。
「こんな奴なんだけど。私はこれをネメシスと名付けたわ」
「ヒナギクさんにしてはまともなネーミングですね」

「何ですって！？」

桂さんが額に青筋を浮かべる。

「ならば、その化け物を倒せばいいのでは？」

「一度戦つたけど無理よ。ゾンビと違つて、何度切りつけても平氣な顔で攻撃してくるの」

「どんだけタフなんですか、そいつ」

「兎に角、何か食べたいなら銀杏商店街のどんぐりに向かう必要があるわね。でも、街はゾンビがうじゅうじゅう居るから大変よ」

「それでも行くわ」

「じゃあ、私と天王州さんはいいとして、ハヤテくんの武器を調達しないとね」

「いいですよ。僕はこれがありますんで」

そう言ってハヤテが取り出したのはカルアサルトライフルの愛用武器だ。しかも弾倉がの形をしており、弾数に制限がない。

「ちょっとハヤテ、銃刀法違反よ」

「アーランこそ白桜」

「う、……」

「じゃ、行きましょうか」

桂さんが昇降口へ向かつ。私たちはその後を追つた。

1 バイオハザード発生（後書き）

次回更新未定

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0730/>

ハヤテのごとく！～BIOHAZARD～

2010年10月12日13時27分発行